

蝶の博物詩

生態31

交尾4



ウスバシロチョウの交尾
(1997年6月7日 野尻湖)

photo by

Nishiyama



ウスバシロチョウの貞操帯
(1994年6月5日 野尻湖)

蝶の博物詩

生態31

交尾4

昨年の秋、庭の草むらにオンブバッタが何組もみられた。交尾しないまでも、雌の半分ほどの大きさの雄が、雌の背中にしがみついている。同じ時期に、アキアカネの雌雄のペアがキの字型に連結し、群れをなして山から帰ってくるのが、私の子どものころ、東京近郊でもよくみられた。童謡“赤とんぼ”の懐かしい光景は今もまったくみられない。20年ほど前から使用されたfipronilという殺虫剤の影響であろう。

アカトンボの雌雄がハート型に結合するのは特徴的であり、交尾後も雄は雌の首根っこを押さえたまま飛び、雌は水面を叩いて産卵する。オンブバッタやアカトンボの例のごとく、交尾後も雌を把握して、ほかの雄からの掠奪、雌の不倫から守っているのは自分の遺伝子を残すという本能的欲求である。

トンボの中にはもっと積極的な術を使うものがある。水田の流水の付近にたくさん飛んでいるカワトンボの仲間の雄は既婚の雌に遭遇した場合、スプーン状の突起があるエデアグス(ペニスに相当する)で、雌の貯精囊の中にある前夫の精包を掻き出してから自分の精子を送り込む。また世界最小(体長1.5 cm)の赤いハッチョウトンボは前夫の精包を奥のほうに押しやってから自分の精包を送り込むそうである。

交尾後に雌を守る、つまり自分の遺伝子を守る普通の方法はいつまでも交尾姿勢を続けていることかもしれない。人目につかない草むらで交尾することの多い蝶はだいたい1時間ほど、夜間に交わる蛾は翌日まで、とくにドクガ科のマイマイガなどは1日以上続く。人間をはじめとする天敵に襲われることもあろうが、夫婦同時ならば以って瞑すべしともいえる。

交尾時間の長い昆虫もいれば、交尾回数の多いものもある。最近『昆虫の交尾は、味わい深い…。』という味のある本を出された上村佳孝氏によれば、庭石の下などによくみかけるハサミムシの仲間のコバネハサミムシは一晚に平均14回、最大42回も交尾するという。若いころ、悪友の1人が“抜かず3回”などと威張っていたが、昆虫に比べれば物の数ではない。

交尾終了後、体が離れた後も雌を見張るために、交尾口に栓をすることを考案した蝶がいる。交尾の際に雌は精包物質を送り込むと同時に、尾端から粘液を分泌して雌の交尾口をふさぎ、これが固まって交尾囊または受胎囊と呼ばれる栓が形成される。いわば中世十字軍騎士が夫人、愛人に使わせた貞操帯のようなものである。ギフチョウ、ヒメギフチョウ、ウスバシロチョウ、ウスバキチョウなど、小型のアゲハでみられ、形や色は種によって違う。ウスバシロチョウの集まった場所で、乱暴に貞操帯を取ろうとする雄の様子をカメラに収めることができる。

ある種のコガネグモの雄は交尾の瞬間に心停止し、自分自身を貞操帯として捧げて雌を守る壮絶なムシもいる。一生雄の死骸をつけたまま生きるのも迷惑だろうが、

西山茂夫